

船員の島から高齢者の島に — 香川県栗島の場合

木村良夫

1 はじめに

栗島は、瀬戸大橋の西約 17 km に位置する塩飽諸島最西端の島である。面積は、4.1 平方 km で、行政的には香川県詫間町（2006 年 1 月に合併して現在は三豊市）に属する。かつては、外洋航路の船員を職業とする者の比率が全国で一番高い島といわれ、「船員の島」として有名であった。しかし、現在では現職の船員の数が激減し、かつて 3 千人いたという人口も 350 人を下回るまでに減少し、老年人口比率が 70% に達する高齢者の島となっている。島の学校も、2006 年 3 月の中学校の閉鎖ですべてなくなった。

ここでは、このようになった歴史的な経過を概括すると共に、現在の地域社会がどのようにして維持されているかを明らかにする。

2 栗島の経済基盤の変遷

江戸時代後期の栗島には北前船を所有し航海業に従事する者が多かった。

明治 30（1897）年 5 月、こういった海事への伝統を引き継いで、村立栗島航海学校が設立された。この海員養成学校は、1899 年 7 月に三豊郡立香川県栗島航海学校、1906 年 4 月には、香川県立栗島航海学校となり、1940 年 7 月に官立栗島商船学校となった。この学校からは日本の外航船を支えた多くの高級船員が輩出している。

栗島航海学校は、第 2 次大戦後の 1946 年に廃校となった。しかし、同年 4 月に国立宮崎海員養成学校が移転してきた。さらに、翌 1947 年国立栗島海員養成所が併設された。この海員養成所は 1952 年運輸省令で海員学校に改称された。その後、1954 年に宮崎海員学校は廃止された。その後、運輸省栗島海員学校が存続するが、1987 年 3 月で廃止となった。

廃校にいたる原因として、[2] (p6) に次のような記述がある。

『ところが、(昭和) 50 年代後半から海運界に不況の波が押し寄せ、合理化の一環として出来るだけ機械化し乗組人員を減らし、さらに単純な作業は外国人を雇うなど人件費の削減をはかるため、海員学校生の就職は困難となり、入学志望者が定員に足りなくなったので、受験生の少ない学校の順に廃校となり、栗島海員学校は昭和 62 年 3 月 31 日をもって 90 年の歴史を閉じた。』

ここに記載されているように、海運業界の環境が変わり、賃金の安い外国人船員が多数雇用されるようになったために就職難となったことと共に、長期にわたる海上生活を伴う外国航路の船員が職業として敬遠されるようになったといったこともあり、海運業に就くことを希望する栗島出身の若者の数が急減していった。[1] (p12-p13) には、その間の事情が述べられると共に、『1970 年に調査した当時、それまでの栗島の歴史からして船員への道を歩むであろうと思われた子供が、普通高校から一般の大学に進学する方向に転換しはじ

めていた。』との記述がある。

その結果、船員世帯は減少を続け、[1]によると、1960年で135世帯（船員OBを含む）いたものが、1991年時点で船員OBを含んで80世帯、うち現役世帯が19となっている。

次の表は、日本離島センター発行の離島統計年報から取った粟島の産業分野別就労者数の変化である。

	1965年	1985年	1990年	1995年	2000年
農業		104	34	53	2
林業		0	0	0	0
漁業		74	72	55	44
第1次小計	324	178	106	108	46
鉱業		0	0	2	0
建設業		8	6	7	7
製造業	38	24	18	12	7
第2次小計	38	32	24	21	14
電気・ガス業		0	0	0	0
運輸・通信業	203	86	49	25	15
卸・小売・飲食業	47	37	23	19	16
金融・保険業	0	0	0	1	0
不動産業		1	1	1	0
サービス業		45	33	30	35
公務		7	6	6	4
その他	11	0	0		0
第3次小計	313	176	112	82	70
合計	675	386	242	211	130
人口(4/1住民票)	1670	807	642	547	434
就労者の比率	40.4	47.8	37.7	38.6	30.0

1965年に203人いた運輸・通信業に従事していた者（多くは船員であったと思われる）が、大きく減少している。また、農業従事者の減少も著しく、2000年には2名ということである。家庭菜園やびわやいちじくなどの小規模な果樹栽培は現在も島内に広く見られるが、職業としての農業はほぼ消滅したと考えられる。

漁業は、かき、ふぐ、ひらめ、のりの養殖が行われており、一定数の従事者が存在する。サービス業としては、宿泊施設ル・ポール粟島と民宿5軒があり、一定数の従事者がいる。

この他にも、昭和20年代まで、阿島山の土を使った瓦製造業が西浜地区にあり、昭和初

期の最盛期には 150 人から 200 人が働いていたという ([2])。

観光業については、昭和 30 年代に海水浴客が四国本土から訪れていたようで、須田から海水浴場となっていた馬城まで直行の連絡船が出ていたようであった。当時、公民館の支館長であった紀豊氏（長く粟島で小学校の先生をしていた）が、ガリ版印刷の通信を発行されていて、その中で粟島の観光について島の自然と歴史を活かした観光の構想を出していた。それについては、関連部分を資料として添付している。

海員学校が閉鎖になった後、跡地を利用して 1990 年宿泊施設ル・ポールが設置され、島としては観光に大きな期待を寄せた。1988 年 4 月に瀬戸大橋ができており、一時はかなりの観光客が来た ([1]によると、1991 年度で 2432 名の宿泊客があった)。また、JR 四国が 7 泊のサマーキャンプを実施するなどといった経営努力もあるが、橋のブームが過ぎると宿泊者数も減り、ル・ポールは赤字経営が続いている。この他に数軒、民宿等の宿泊施設がある。中にはインターネットを活用して県外からかなりの数の利用者を確保している民宿もあるが、子育て世代が生活できるだけの収入を得ることは難しく、島の新しい経済基盤となるには課題が多い。

現在の島民の生活を支えている最大の収入は年金である。船員 OB の年金は高額であり、島の高齢者の中で条件のよい年金を受給している人の割合は大きい。

3 人口の変化

粟島は早くから開けた島で、縄文時代中期、弥生時代には既に人が住んでいたようである。さらに、「明治 8 年の記録によると戸数 293、人口 1273 人、反別 44 町余りとなっている。」とある ([2])。

第 2 次大戦後の人口については、昭和 24 年に 514 戸、2369 人と記されている ([2])。その後の人口について、香川県統計調査課から送っていただいた香川県内離島の人口の推移によると、国勢調査による人口として、昭和 30 年 1754 人、昭和 35 年 1761 人、昭和 40 年 1548 人、昭和 45 年 1387 人があがっている。

以下、詫間町から提供された昭和 37 年以降の 4 月 1 日現在の人口の変遷を 5 年ごとに記す。これらの人口は前年度の 10 月に行われた国勢調査の人口を基にしているものである。人口は一貫して減っているが、海員学校が閉鎖となった 1987 年を含む 5 年間の減少が顕著である。

1966 年（昭和 41 年） 1704 人
1971 年（昭和 46 年） 1387 人
1976 年（昭和 51 年） 1110 人
1981 年（昭和 56 年） 936 人
1986 年（昭和 61 年） 799 人
1991 年（平成 3 年） 617 人
1996 年（平成 8 年） 517 人

2001年（平成13年）407人

2005年（平成17年）349人（10月1日国勢調査時の人口）

粟島小学校休校記念誌（平成17年3月16日発行）によると、粟島小学校の児童数は、1958年の331人をピークである。その後、急速に減少し、6年後の1964年には半数以下の148人となっている。その後、1975年に100名を切り、92名となった。

社会増減を見ると一貫した転出超過であるが、島の人たちはどこに移って行ったのだろうか。[3]に、昭和36年から38年までの地方別転出者の割合が載っている。それによると、兵庫県26%、香川県内18%、大阪府14%、神奈川県9.1%、東京都7.8%、その他25.1%となっており、県外への転出の比率が大きい。兵庫県への転出が多いことについて「粟島は船員の島であるので、神戸港や造船所のある兵庫県へ行くようになるのである」といった記述がある。

当時は、地方から都市部への人口移動が起こっていた時期でもあるし、粟島の若者が多く船員になっていた時期でもあったために県外への移動が多数を占めている。その後、転入転出とも県内移動の比重が大きくなっている。[1]には、1980年から1991年にかけての移動先についての記述があるが、香川県内の中でも、高松市以西の地域に限られてきていることが記されている。今回の調査では、個人情報との関係で、転出先のデータの閲覧が出来ず詳しいことはわからないが、聞き取りでは、病気になって特養に入る例を含め詫間町に移る事例が多いく、県外は少なかった。

1990年から2005年にかけての年齢階級別の人口の変化をまとめたものが次ページの表である。

変化率というのは、ある年齢階級の人口が10年後にどれだけいるかを比率で出したものである。これを見ると、10代から20代にかけて若者の転出が激しい。さらに、50代前半までの層でかなりの転出超過が見られる。それに対して、55-74歳の層では人口が安定しており、50代から60代では転入超過の傾向が見られる。

75歳以上の層では、減少が見られ、転出超過になっていると思われる。

65歳以上の高齢者比率は、1990年、1995年、2000年、2005年の順に42.1%、51.5%、58.8%、72.2%と上昇している。さらに、2000年には、65-74歳の前期老人人口118名に対して、75歳以上の後期老人人口が126名となり、初めて後期老人の方が多くなった。

人口が減少する中で、集落の消滅も起こっている。島の西端の美しい砂浜に面して「姫路」と呼ばれる集落があったが、今は消滅している。[2]のなかに「姫路は、兵庫県の都市姫路と字も発音も同じである。僅か4、5軒しか人家のない小部落であるが墓地等から考えると相当古くから人が住んでいたことがわかる。」という記述がある。数十年前にはまだ部落が存在していたことが分かる。

全体としては転出超過が続く粟島であるが、Iターンで入ってきている人たちもいる。定年退職後神戸から移り住んで地域に溶け込み連合自治会長を務めた元山さんと奥さん、阪神大震災の後自営の工場が倒産して移り住んだ松原さん夫妻、母親の介護のために移り住

み今はスナックを開いている A さん夫妻、会席を出す民宿を営んでいる B さん夫妻などである。いずれも、60 歳前後で島に移ってきて活発に活動している。志々島では見られない現象である。島にはかなりの数の空き家があり、借家の賃貸料は菜園付きの一戸建てで月に 1 万円から 2 万円と安い。粟島の場合には、島の女性と結婚して島外から移り住んだ人たちがかなりおり、島としては開放性が高いといわれるが、それでも、適当なつてがないと簡単に借りることができないといった状況がある。

表 年齢階級別人口の変化（粟島 1990 年から 2005 年）

年齢階級	1990 年	1995 年	2000 年	2005 年	変化率	
					90→00	95→05
0-4	15	3	1	0		
5-9	16	14	2	0		
10-14	22	18	11	2	0.73	0.67
15-19	21	8	7	2	0.44	0.14
20-24	6	3	3	0	0.14	0.00
25-29	10	4	3	1	0.14	0.13
30-34	14	6	4	2	0.67	0.67
35-39	16	14	6	5	0.60	1.25
40-44	33	12	12	2	0.86	0.33
45-49	28	24	10	10	0.63	0.71
50-54	58	27	26	12	0.79	1.00
55-59	62	57	30	31	1.07	1.29
60-64	60	64	56	30	0.97	1.11
65-69	78	63	61	59	0.98	1.04
70-74	71	75	57	60	0.95	0.94
75-79	57	59	62	51	0.79	0.81
80-84	32	44	39	45	0.55	0.60
85-89	15	29	25	26		
90-94	9			9		
95-99	0			2		
100-	0			0		
合計	623	524	415	349		

4 粟島の住民生活を支える施設・組織

島の住民生活を支える施設・組織としてどのようなものがあり、いかに機能しているか列挙してみる。

- ・医療 民間の診療所があり、高齢の医師が週 5 日通ってくる。夜間、週末は医師がいない。
- ・介護 詫間町の私立病院が経営するデイサービスセンターがあり、2006 年 2 月の開所当時は数名であった利用者が増え 2007 年 2 月現在 15 名が利用している。木曜日と日曜日は休み。また、島の中でホームヘルパーとして働いている人もいる。
- ・高齢者への給食サービス 社会福祉協議会が中心になり、粟島開発総合センターで調理し、会食方式で行われている。以前は認めていなかった一般世帯からの利用も現在では可能であるが、高齢者のみの世帯からの利用が大部分を占める。毎週、火、木、金の 3 回実施しており、毎回 20 名程度が参加している。3 班に分け、送迎サービスもしている。各利用者にとっては月に 2 回受けられるようにしている。本人負担は 1 回 450 円である。
- ・消防団 あり。団長は JA に勤めている 40 代の男性。団の倉庫があり、一応の用具も持っているが、定期船で、小型の消防車を運んでくることができる。
- ・市の支所 粟島離島開発センターの中にある。正規の職員はいない。アルバイトの島民がひとりいて、証明書の発行などをしてくれる。
- ・警察 駐在所はあるが、常駐はしていない。たまに巡回に来る。
- ・郵便 郵便局が港の近くにあり、局員が 2 名いる。配達は、委託で粟島の住民の一人が毎日バイクで配達している。
- ・新聞 各戸配布あり。朝一番 6:00 の定期船で届くので、7 時から 7 時半頃に各家に届く。
- ・金融 島に銀行はない。島の郵便局か農協、漁協を利用する。あるいは、詫間の銀行を利用する。
- ・水道 1976 年 12 月、荘内半島積地区から海底送水管によって送水することで粟島全体に上水道が通じることになった。それまでは生活に必要な水は井戸によってまかなっていた。1999 年 3 月ステンレス鋼管による施設替えを行う。
- ・ガス プロパンガスを使用。
- ・ごみ 市の船が来て週 2 回回収される。島に 3,4 箇所ある集積所に持ち込む。そこまでの距離が遠く不便を感じている人もいる。
- ・トイレ 港の周辺は水洗になっている。他の地域に対しては汲み取りを行っている。
- ・交通 詫間町須田港と潟の港を結ぶ定期船が 1 日 8 便ある（大人 1 人 320 円）。多くの町民がこれを利用している。他に、詫間町宮下から志々島を経由して粟島潟港にはいる定期船もある。他に、Y さんの宅急便を運ぶ海上タクシーに乗る（1 人 500 円）方法や海上タクシーを頼む（2000 円）方法がある。須田に車を置いている人もいる。
個人で船を持っている人もおり、船に乗って買い物に行く場合もある。
- ・宅急便 海上タクシーと民宿をしている Y さんが、宅急便の配達をしている。割り増し料金は必要ない。以前は、自宅までの配達はなく、ひとりひとりの島民が定期船の待合室まで取りに来なければいけなかったのが便利になった。

- ・商店 潟地区に2軒あり、日用品、果物、酒類、ガソリンなどを売っている。肉・魚を販売する日がある。農協、漁協でも購買コーナーがある。理髪店はない。
 - ・飲食店 宿泊施設ル・ポールの食堂で食事をすることもできる。予約すれば、民宿でも食事が出来る。スナックとカラオケもある。
 - ・自治会 11の地域別自治会がある。連合自治会の会長さんは70代の方がすることが多い。連合自治会と公民館の分館が繋がっていて、分館長は島を代表する役割を持っている。中学校が休校になったため、今年の運動会は分館の主催となった。
 - ・学校 幼稚園、小学校、中学校の順に休校となり、今島には学校がない。対象となる子供はいない。地方（じかた）の高校に通う生徒が一人いる。
 - ・老人会 会長さんは船員OBの人で、75歳。
 - ・講中（こうじゅう）島四国八十八箇所めぐりのために、道の草刈をしたり、接待をしたりする各地区の組織。高齢化に伴って、維持が困難になっている。集落がなくなった姫路地区への道沿いに10くらいの石仏があるが、2006年は島全体のボランティアを分館長が呼びかけて道の草刈をした。
 - ・百手祭り 弓の普及のためにやり始めた。以前は各部落から世話役を出して取り組んでいたようだが、今は世話役が1本釣りをして計12人に頼む。
 - ・道路 車が通れる道路がある。軽自動車を中心、自動2輪の利用も盛んである。城山登山道の草刈も年2回島民の手で行われている。阿島山を周わる道は通れなくなっている。
 - ・寺院 寺はあるが、住職がいない。葬式については、3年前に島で行ったのが最後で、それ以後は詫間で行っているそうである。島で葬儀をすると詫間町の焼き場まで運ばねばならず、それが大変だとのことであった。
- 以上、住民の生活と関連した施設や組織を列挙したが、買い物と診療の一部と葬儀以外はおおむね島内部で行われている。

5 粟島の高齢者と地域に密着した小ビジネス

高齢者が極めて多い粟島であるが、高齢者の中で一人暮らしの人が多くことも特徴である。[5]によると、1995年4月時点で、265世帯中一人暮らし世帯が81（30.6%）ある。それが、2005年10月の国勢調査によると、198世帯中一人暮らし世帯が72（36.4%）、2人世帯108（54.5%）、3人以上の世帯18（9.1%）となっている。1世帯あたりの人数が小さくなり、一人暮らし世帯が増加していることが分かる。さらに、65歳以上親族がいる世帯が167世帯あり、そのうち59世帯（35.3%）が一人暮らし世帯で、夫婦のみの世帯が75世帯（44.9%）となっている。夫婦と子供からなる世帯は9世帯（5.4%）にすぎない。高齢者の多くが、高齢者のみで住んでおり、一人暮らしも1/3以上いることが分かる。

一方、高齢者の中で島に住み続けたいという意思を持っている者が多いという。一人暮らしといっても、島の中に親戚がいる者がほとんどであるし、近所の人とも顔見知りであ

る。島内での交流・交際も盛んである。また、日帰り圏内である詫間町あるいは県内に子供が住んでいる者が多く、いざとなると頼れる状況にある。

島の高齢者は自治体の公的な支援と島民による自主的な助け合いによって支えられて生活しているが、さらに、島民や来島者のちょっとした需要に答えるビジネスがあり、それが生活の便利さを確保している。

大阪から移住した M さんが始めたという、小規模な家の修繕などをする便利屋さんなどもそういった仕事のひとつである。工務店に頼むほどではないが、高齢者には難しい家の修理などを手軽にする仕事である。また、毎日観音寺市まで買出しの船を出す商店が個別の要望に応じて買出しをする例もある。海上タクシーの存在などもそういった仕事と見られないこともない。この海上タクシーは 2000 円から利用でき、他の地域のそれよりも安く利用し易い。1 往復は宅急便をかねて定時運行しており、連絡船の空き時間を埋める便利な存在となっている。また、島にはレンタカーがないが、民宿に泊まればその車を貸してもらえる。墓参りに来た人が海上タクシーを利用し、その車を借りるといったこともあるようである。昼食時間だけ開くうどん屋さんもあった（80 歳前後のおばあさんが一人でやっていたが、高齢のため 2006 年に閉鎖した）。

小ビジネスは、柔軟に小規模な需要に対応する。宅急便や海上タクシーはその好例である。1995 年にまとめられた栗島の老人福祉に関する報告書[5]によると、宅急便と特船（連絡船を時間外に運航してもらうこと）についての要望が強いことが記されている。当時は、連絡船（栗島汽船）を使って宅急便が運ばれており、荷物 1 個につき 330 円と大人一人の料金 310 円より高い別料金が必要であった上に、自宅までの配達もなかった。また、夜間病人が出た場合などは、栗島汽船に依頼して特船を出してもらう必要があったが、料金が 8000 円もかかり負担になっていた。その後、宅配便を兼ねた海上タクシーが営業されるようになり島民に便利がられている。

とはいえ、小ビジネスの場合、仕事を提供する側から見れば十分な収入になるだけの仕事がなかなか確保されない。そのために、複数の仕事をしている場合や年金収入がある人がパート的な位置づけでおこなっているのが特徴である。年齢的には 60 代の人たちがそれを担っている。

6 瀬戸内の「限界集落」

栗島、志々島は老年人口指数が 50%を越える超高齢社会となっているが、これは瀬戸内の島嶼部において広範にみられることである。[4]に載っている 2000 年のデータによると、瀬戸内の有人島は 140 であり、そのうち 14 歳以下のこどもが全くいない島が 30 ある。また、老年人口指数が 50%を超える島は 50 にのぼる。これは、瀬戸内の島の 35.7%にあたる。さらに、老年人口指数が高い島を 20 あげると以下の表の通りとなる。17 島が 70%以上の老年人口指数を示している。大野晃は、老年人口指数が 50%以上の集落を「限界集落」と呼び、山村においてそれが広範に広がりつつあることを指摘したが、瀬戸内の島嶼部にお

いても、同様のことが広く起こっていることが分かる。粟島、志々島の事例は決して特殊なことではないのである。

とはいえ、島の「限界集落」を山村の「限界集落」と比較するとかなりの違いが見られる。島の場合には、地方（じかた）と連絡船によって結ばれているといっても、限られた本数しかなく、道路によって24時間町の中心部と結ばれている山村の集落とは比較にならない隔絶性を持っている。そのために、島の場合には行政の支所や診療所、郵便局、商店などが存在する場合が多い。これに対して、山村の「限界集落」ではそういった機関がなく本当に個人の家と公民館があるだけのところが多い。

とはいえ、いずれの場合にも、経済基盤が衰退し跡継ぎ世代が集落を出て、高齢者ばかりが居住するようになっていくことは共通している。そういう点では、都市部の古い分譲住宅などの超高齢地域とはまた違いがある。都市部の場合には、元々職住が分離しており、固定的な住居が世代の交代を阻害しているために超高齢地域が生まれるなど職とは別の理由によっていると考えられるからである。

島名	65歳以上%
黒髪島・仙島	100
志々島	93
小佐木島	86
前島	86
情島なさけ	85
津島	85
笠佐島	85
牛島	84
小島おじま	83
青島	82
八島	82
手島	81
小大下島	80
佐柳島	74
小飛島	70
高見島	70
黒島	70
端島はしま	69
平群島	68
馬島	68

参考文献

- [1] 戸所隆他、『船員の島・粟島における経済基盤と空間構造の変化』、立命館大学人文科学研究紀要 No.62、1994年3月発行
- [2] 香川民俗学会、『粟島の民俗』、1989年1月
- [3] 香川県立観音寺第一高等学校地歴部、『地歴の窓』第6号粟島レポート、1972年7月
- [4] 日本離島センター、『日本の島ガイド』第2版、日本離島センター発行、2004年7月
- [5] 宮崎昭夫編集、『粟島月の福祉の発展をめざして—粟島地区老人福祉調査報告書』、四国学院大学社会学部老人福祉研究室発行、1995年4月、